

## ■ 編集だより

### 編集後記

精神医学で扱うところの問題について、最先端の科学ではその理解が難しく科学的で合理的にところを理解することは限界があるのではないかと、精神科の先生方は一体どのように患者さんのところを理解しているのかと精神科医になる前の学生の頃によく考えていた。そして、精神科の教室にお世話になりたてのところ、先輩の先生から『患者さんから「こんなひどい事で悩んでいる自分と同じ経験をしたことのない先生には本当のことはわからない」とよく言われるが、「確かにわからないかもしれないがわかろうと精一杯の努力をしている」と答えるようにしている』というお話を伺って、自身なりに理解するように努力すること自体が大切ではないかと納得したことがある。

日常臨床や様々な研究や教育的な役割の中で判断が必要な状況が増えてきているが、自分なりの努力は払いつつも、適切な判断があまり出来ていないように感じて、少し悩むことがあった。そのような時に夏目漱石の小品「夢十夜」の中のある話が心に留まった。次のような話であった。『護国寺の山門で仁王を刻んでいる運慶の夢を見た。運慶が仁王の顔を彫りはじめた。その刀（とう）の入れ方が如何にも無遠慮であり、少しの疑念も挟まないように見えた。「能くああ無造作に鑿（のみ）を使って、思うような眉（まみえ）や鼻が出来るもんだな」と感心して漱石が言った。すると若い者はこう答えた。「なに、あれは眉や鼻を鑿で作っているんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿や鋤の力で掘り出すまで。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決してまちがうはずはない」といった』という話である。この話から敷衍して自分自身が遭遇する出来事や事象の中に真実や本質が見えないとき判断に迷うのではないかと思えるようになった。

初期臨床研修において精神科研修が必須となってからある程度の期間が経過して、学生実習においてもクリニカルクラークシップといった実地型の教育が普及し、多くの精神科医師が教育的な役割も担う時代になった。精神科での研修の中で伝える内容としては精神科的な診察の基本（よく話を聞くこと）を教えることが期待されていると理解している。実際の1ヶ月程度という短期間では精神科的な教育が十分行えるものではないが、「適切な判断力を持つ医師を育てること」という一般的な目標の中で、「心の目を養うこと」をどう伝えるのかも大切ではないかと考えている。

自身の編集委員としての立場においては（可能な限りではあるが）適切な判断を行うように心がけて、投稿をいただいた論文の価値を深めていく役割を担わせていただければと念じている。日ごろの編集委員会で話されていることの多くの時間は、会員諸氏の先生方の貴重な投稿論文について本質的な価値を高めるためにどのような修正をしていただいたらよいか、そのためにどのようにお返事をさせていただいたらよいかという点に多くの時間が割かれている。投稿された先生方と編集委員会との共同作業により、精神科領域における課題に意欲的に取り組まれた各論文の持つ意義をさらに高めることの役割の一端を担えることができれば幸いである。

谷井久志